

明治史料館通信

1998. 4. 25 (季刊 年4回発行) Vol.14 No.1 通巻第53号



徳川慶喜書「楽天理」扁額
(江原素六関係史料・遺品D-12)
3階展示室 江原邸内に常設展示中

天理を楽しむとは、天地自然の道理を楽しむということ、人生を否定的に考えることなく樂觀することである。慶喜は「楽天理」の文字を落款としても用いているが、維新後の長い隠遁生活の心境を象徴していると言える。江原素六は明治44年(1911)に宗家徳川家達家の家政相談役となるなど、旧主徳川家との関係は浅くなかったが、徳川慶喜家との関係については不明で、この額の由来もよくわからない。

シリーズ

沼津兵学校とその人材

49

実現しなかった 箱館戦争への出兵

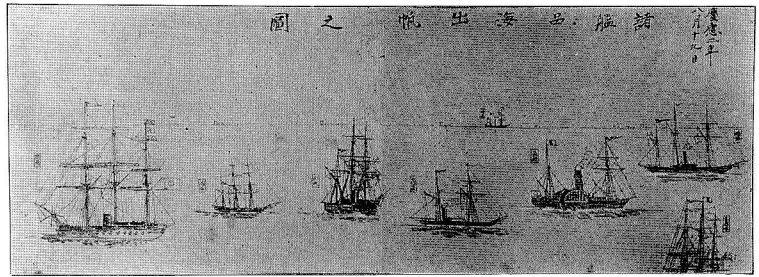
明治元年(一八六八)十一月、政府から静岡藩(駿河府中藩)主徳川亀之助(家達)に対して恐るべき命令が下された。箱館五稜郭に立てこもった榎本武揚ら旧幕府脱走軍を討伐せよというのである。命令書の文面には「格別ノ配慮ヲ以、其方工征討被 仰付候事」とあった。徳川の旧臣たちを徳川家自らに攻撃させるというのである。

この命令を受け「恐愕」し、「日夜痛心」した静岡藩側では、家達の後見人をつとめていた元津山藩主松平確堂が代表し、家達は幼弱であり自ら戦地に赴くことはできないので、勦弁してほしいと政府に願い出た。その代わり、謹慎中の前將軍徳川慶喜の処分を解いてもらえば、慶喜に軍を率いさせ箱館討伐に向かわせたいという、代案を提示し、嘆願した。この嘆願は勝海舟が大久保利通の支援を得て画策したのもらしい。勝は十一月十一日から二十六日まで東京に滞在、三条実美や岩倉具



河田 照

美らとも面会し、慶喜赦免について奔走していた。政府部内では、この静岡藩側の



品川沖を出帆し蝦夷地へ向かう榎本艦隊
(『正智遺稿』より)

逆提案を検討したらしいが、結局慶喜の謹慎解除・箱館出張の件は許可されず、同月、松平確堂に対して徳川民部大輔(昭武)を出張させるべしという新たな命令が言い渡された。つまり、慶喜の弟である徳川昭武を箱館追討軍の大將として派遣せよというのである。

昭武はその月、フランス留学から帰国したばかりであった。静岡藩内では、十一月十日に左のような命令が伝達された。

① 河田貫之助
箱館工兵隊差出候様被 仰出候

② 阿部邦之助
藤沢長太郎
江原三介
別紙ノ通、從 朝廷被 仰出候間、被得其意、式大隊ノ兵迅速用意致シ、調次第出張可為致候、尤河田貫之助為総括被差遣候、諸事差図ヲ請候様、可被申渡候

③

天野民七郎
男谷勝三郎

箱館表工兵隊差出候様 被仰出候二付、其方共儀、被差遣候間、

諸事河田貫之助申合、不都合無之様、可被致候

①は、河田照(貫之助)に対して箱館への出兵軍の総括を命じるというもの。河田は大目付の職にあり、後には少参事・学校掛になった人である。

②は、箱館出兵のため二大隊の兵を急いで用意せよというものであり、当時、沼津兵学校の開設準備にあたっていた陸軍御用重立取扱阿部潜・藤沢次謙・江原素六の三名に下された命令である。

③は、河田とともに箱館への出張を命じるという、御目付天野民七郎(後沼津勤番組之頭並)、御目付助男谷忠友(勝三郎、後島田最寄権少参事)に対する指令である。

沼津では、先月十月から兵学校教授陣の任命や生徒の指名が開始されていた。まさに、開校準備真っ最中の時期である。

すでに公布されていた「陸軍解兵御仕方書」では、沼津兵学校における教授・生徒は、戦時に際しては士官として従軍することが明記されていたが、まさかこんなに

早くそれが現実のものとなろうとは当事者も考えていなかったであろう。出兵する兵士二大隊がどこでどのように選抜されることになつていたかは不明であるが、陸軍関係者が多く移住していた沼津がその有力な候補地であったことは間違いない。兵学校の教授・生徒の予定者の多くが従軍を命じられたかもしれないのである。

しかし結局、この箱館出兵命令は実行されなかった。何らかの理由で政府の方針が変わつたのである。旧幕臣同志による相討ちは回避され、戦場で肉親が殺し合う悲劇も起こらなかった。また、出兵が行われていたら沼津兵学校は開校できなかったかもしれない、たとえ開校したとしても大幅に遅れたのではないかと予想される。しかし、その後の現実には、むしろ箱館降伏者さえも取り込み、沼津兵学校は隆盛を迎えることになったのである。

〈参考文献〉『明治初期静岡県史料』第五卷(六八頁)、『勝海舟全集19』、『大久保利通日記一』、松浦玲『徳川慶喜 増補版』

お知らせ欄

◎沼津兵学校附属小学校跡の記念碑が建立されました

去る三月三十日、沼津市大手町の歩道に沼津兵学校附属小学校跡の記念碑が建立され、除幕式が行われました。同碑は香陵ライオンズクラブによって建設され沼津市に寄付されました。

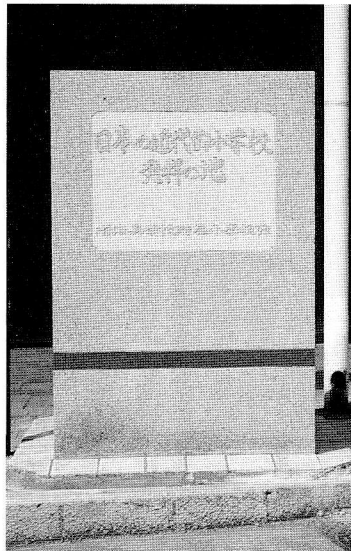
これによって、明治から戦前期に建てられた沼津兵学校の記念碑・址碑に加え、附属小学校についてもその位置が示され顕彰されることになったわけです。日本最初の小学校跡地であり、沼津市の新たな史跡となることでしょう。

題字は斎藤衛沼津市長、碑文は国士館大学教授で当館の協議会委員でもある四方一潞氏によるもので、文面は下記の通りです。

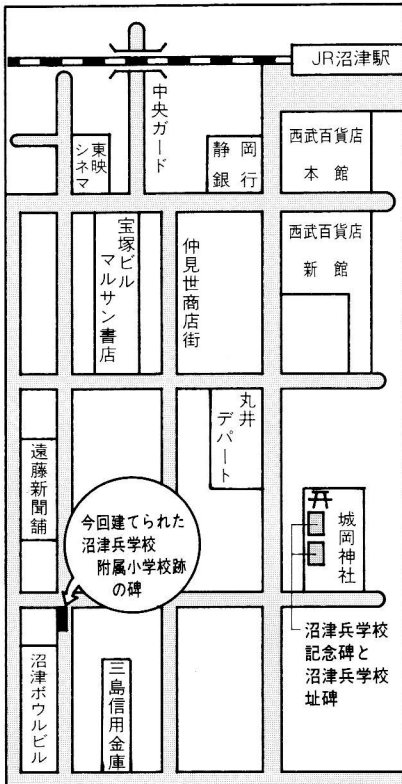
日本の近代的小学校発祥の地幕末維新の動乱の中、静岡藩は沼津に、当時のわが国最高の教育・文化の粋沼津兵学校を開設した。明治元年設立された兵学校附属小学校は代戯館に端を発し、士族平民の列なく入学を許し、洋算・地



歩道側



車道側



理など新時代の教科や教授法を採り入れたわが国最初の近代的小学校である。校地の移転拡張がつづいたが明治三年、沼津城西の外堀に面して赤松大三郎設計になる宏壮な校舎が建てられた。沼津市立第一小学校はその伝統を受け継ぐものである。

平成十年三月 四方一潞撰文
◎企画展「本のぬまづ人物誌―館蔵コレクションの紹介―」が開催されました

去る三月一日から三十一日の開期で、企画展「本のぬまづ人物誌―館蔵コレクションの紹介―」が開催されました。当館が開館以来収集（購入）してきた、沼津兵学校や静岡学問所の教授・生徒の著作、沼津藩士出身者の著作、近代の沼津の人物の著作など、郷土ゆかりのさまざまな分野の和装本・洋装本を展示しました。当館の日常的な資料収集活動の中間報告でもあります。

◎図録「本のぬまづ人物誌 館蔵コレクションの紹介」の刊行
企画展に合わせ図録を刊行しました。中には当館所蔵の書籍資料

目録も収録しており、館蔵コレクションの全貌を初めて公開する内容となっています。五二頁、内カラー四頁。頒価一〇〇〇円、送料二四〇円。

◎図録『沼津兵学校』の増刷

一九八六年に刊行しました図録『沼津兵学校』は、その後売り切れてしまいましたが、今回増刷をしました。写真と文章による沼津兵学校に関する概説書ともいべき内容です。この機会にお求め下さい。六三頁。頒価一〇〇〇円、送料二四〇円。

◎沼津市明治史料館史料目録21

・22の刊行

史料目録21『本町清水家・間宮家文書目録』(B5版、一三八頁、頒価一〇〇〇円)、22『三津金指家・木負相磯家文書目録』(B5版、九四頁、頒価八〇〇円)。いずれも当館で収蔵している文書資料の目録です。検索にご利用下さい。

◎沼津市博物館紀要22の刊行

体裁：B5版、一〇二頁
頒価：一〇〇〇円
内容：樋口雄彦「沼津兵学校関係

人物履歴集成」、瀬川裕市郎「北屋敷式土器の胎土分析」、小畑みつ子「片浜地区の石造物」

◎ゴールデンウィーク中の開館

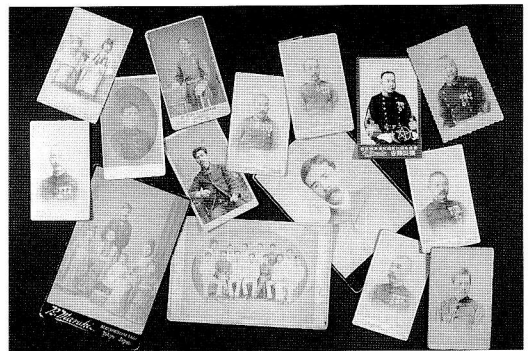
休館日は4月27日(月)、28日(火)、30日(木)、5月6日(水)です。これ以外の日は開館しています。

◎5月19日は無料開館日

5月19日(火)は、江原素六の墓前で記念祭が開かれます。当館では展示室を無料開放します。

◎平成9年度・受贈資料

沼津兵学校出身渡瀬昌邦・寅次郎・庄三郎兄弟関係写真資料(渡瀬雅子氏より)、フィラデルフィア万博出品英文日本教育史(正木みち氏)、沼津兵学校教授乙骨太郎乙書軸他(永井菊枝氏)、明治八年沼津宗門事件綴(鈴木敏氏)、和本(青木健彦氏)、古書・古写真(石井種生氏)、和本(磯崎剛氏)、徳富蘇峰書軸(山村和子氏)、沼津兵学校教授指斐章写真他(指斐暢氏)、沼津兵学校生徒仙波種艶写真(仙波昌枝氏)、関東大震災写真(梅沢さとこ氏)、真野文二著書(後藤寿直氏)、沼津空襲で穴

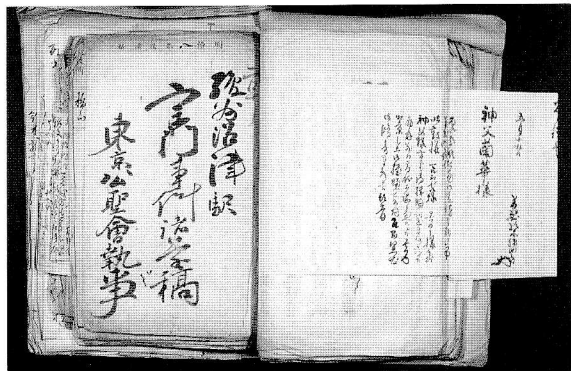


▲渡瀬雅子氏より寄贈された渡瀬3兄弟・沼津兵学校出身者の写真

があいた壁(青木柳雄氏)、金岡地区新幹線送電線関係文書(野崎権次氏)。

◎平成9年度・刊行物への館蔵資料の写真・史料提供先

『静岡県史通史編4近世二』、『図説静岡県史』、前林孝一良『徳川慶喜―静岡の30年』、内田儀久『明治に生きた佐倉藩ゆかりの人々』、『静岡新聞』「あの逸品この逸品」欄、富士市立博物館『夢を紡いだ時代』、『明治建白書集成』第7巻(筑摩書房)、『近世の佐倉』(佐倉市)、『天保期の印旛沼堀割普請』(千葉市)



▲鈴木敏氏より寄贈された明治8年沼津・松長カトリック事件関係綴

◎平成9年度・主な展示用資料貸出先

沼津税務署「税金展」(10月)、静岡平和資料センター「戦争と子ども」展(10月〜3月)、沼津市立図書館(8月)

沼津市明治史料館通信 第53号
編集 沼津市明治史料館
発行
〒410-0051 沼津市西熊堂三七二-1
電話 〇五五九-二三三三三
FAX 〇五五九-二五三〇一八